

変容するねぶた造形 — アート作品化と事例集 —

工藤友哉

本稿では青森県のねぶた祭を起点に、祭山車から現代アートまでその幅を広げる「ねぶた造形」について考察する。“ねぶた”は現代では広義的に、針金と角材による立体的な骨組みに和紙を貼り、墨とロウで書割りと模様描きを施し染料や水性顔料で彩色したものを、内部からの光源で灯す立体造形物を指して言う。これら造形物を制作する技術を“ねぶた技法”などと呼び、祭から離れた場で発表される造形物を“ねぶた技法による〇〇（又はオブジェ、アート等）”と呼ぶ事例が増加している。京都芸術大学における瓜生山ねぶた（京造ねぶた）の登場も、ねぶたが指す領域を広げた一因と見ている。このように現代で“ねぶた”は、祭（民俗行事）、造形物（祭山車/アート）さらに制作技法・技術を内包して指す傾向にある。祭山車の素材と技法はそのままに、姿・形や表現意図が全く異なる作品が増加した今、祭山車以外の（アート）ねぶたの作品事例を整理し、伝統的な山車と現代的なアート作品の棲み分けを整理するのが本稿の目的である。また、祭山車の制作者の作家性についても検証した。

取り上げた事例として、青森市内のねぶた師らによる市内事例を6件・県外事例を4件、県外で発表された青森市外の作り手による事例を約10件、さらに現代美術作家による事例も4件取り上げた。これらのねぶたアート事例から、現時点では「特に青森県外」で「ねぶたの作り手と他の美術作家の共作事例」が大半を占めることを明らかにした。これにより祭山車の作者が美術作家の一面を持つこと、ねぶたアートが祭山車の制作機会を失った際の作家性を保証することなどについて、具体的な事例と共に考察を重ねた。

立体のねぶた造形に加え、平面のねぶた絵においても伝統的な画風から離れた現代的な作風が散見されている。弘前市や黒石市などで活躍するねぶた絵師5名の作品を写真付きで取り上げ、イラスト化・洋画化の傾向にあるねぶた絵アートの現状についても整理した。また、ねぶた作品がアート・芸術として裾野を広げる現代において、その芸術性を今後より深く検証する際に問題となる課題についても提示している。祭の意義として失うことが前提にある祭山車を保存するのか否か、また保存空間の確保の難しさや作品の保存手段・復元技術が確立していない点などを挙げた。

祭の一部に過ぎなかった「ねぶた」は、祭山車としての見栄えを競い地元制作者の手により高度な造形表現へ発展した。現代では、祭山車の完成度の探究と並行し、素材と技法を同じくしたアート作品へも姿を変えている。かつての町内同士の競争のように、山車とアートの造形は今後も双方に刺激を与えつつ、共に完成度を高めていくことが予想される。筆者は今後も、県内外各地の制作者によるアート作品の実例と制作者の取材を続け、変容するねぶた造形の実態や芸術的価値の検証、それに関わる課題についての調査・検証を重ねる。本稿の延長として、次号では祭山車とアート作品における具体的な造形や素材の相違、表現の工夫を取り上げたい。